

## 英語語学留学は「覚醒」の機会となるか。

文学部 英語英米文学科  
准教授 奥村 栄子

英語英米文学科のハワイ半期語学留学から帰国した多くの学生が、その留学生活への充実感や満足感と共に、「自分の英語力のなさを、つくづくと感じた」という感想を洩らす。これは、留学中に英語でコミュニケーションを取ろうとした時に、「必要な英語が出て来ない、思いつかない」あるいは「(その為に)自分が本当に言いたい事が言えない」等々、自分の語彙力や作文力の不十分さをまず最初にいやと言う程思い知らされるからである。そしてその後も英語上達の程度は、期限が限られた留学では、いくら半期、3ヶ月あるとは言え、限度がある。目標言語の英語圏で生活し、英語を英語で勉強する事で、大きい英語力の向上を期待しがちな学生達にとっては、思う様に進歩しない自分の英語に、はがゆい思いもするのであろう。

しかし、この様に、自分の英語力や自分の英語学習について強い自覚を得られる事が、時間や成果が限られた語学留学の最大の意義ではないだろうか。自分がどのような英語学習者であるか、という事を、恐らく始めて意識し、英語学習への自分の取り組み方を、本気になって点検し始める絶好の機会を得られるという事である。

大学でも、英語の母国語話者である講師陣から、英語で行われる必修クラスを取ってはいるが、「英語のみ」の時間は教室限定にならざるを得ず、生活時間の多くを英語で過ごす事になる留学時と比べると、その刺激の強烈さの度合いは比ではないのであろう。そして英語を本気になって習得しよう一念発起する事になる。しかし帰国後の元の日常生活で、この「覚醒」や「やる気」を強く維持し続け、英語の学習に取り組んで行く具体的な行動を取れる学生は多くは無い様である。

つまり、学生が案外認識しない事は、留学中に英語学習に費やした自身の努力と時間の量の意味である。普段の生活での勉学の時間や努力と比べてその量の莫大さについては、語学留学であるから当然と思いき、語学力の向上には、留学時であろうとなかろうと、それだけの努力や学習時間が必要であり、英語習得の為には、それを帰国後の生活に取り入れなければならない、という所まで思いが至らない様である。

例えば、以前筆者のクラスで語学留学へ行った学生達に、留学後の英語学習について訊いてみたところ、一様に「何かしなければいけないとは思いますが特に何もしていない」と言う返事であった。教職のクラスでも、留学中に取った「外国語としての英語教授法」のクラスで学んだ事を紹介してくれる様頼んだところ、誰も積極的にしてくれず、中には「忘れてしまった」という学生もいた。

留学中の「英語学習だけ」の毎日の生活と比べると、日本での生活は落差が大きいのはわかる。社交生活もあるしアルバイトも忙しい。しかし決して安くはない学費、大量の時間やエネルギーを費やして得た留学の成果を少なくとも維持し、あるいは更に伸ばしてゆくには、何らかの形で、少なくとも留学時と同等の学習時間や努力が必要とされる事に気がつかない、あるいは気がついていても、なかなか実行できない様である。

そうすると、教員の方も、「よくがんばった」、「英語が上手になった」等、成果だけを取りあげて褒めるのではなく（無論、褒める事は重要であるが、それだけで終わるのでなく）、その成果を挙げたのは、自身の英語学習に責任があるのは、自分自身に他ならないという、積極的な英語学習者像を学生が自覚し、その自覚を持ち続ける様に助力する事ではないだろうか。英語力が向上したのは費やした自分の努力や学習時間の賜物であって、単に「語学留学に行った」からではない。英語学習には、多大の努力や時間、毎日の学習が必要であり、それを実行する主体は、教師でも教材でもクラスでもない、自分自身である、という自覚である。

この意味で語学留学は、今後も自分が目標とする英語習得をめざして真剣な努力を始める、恐らく長い道程となる、その始まりでしか無い事を認識でき、覚醒した英語学習者へと変貌できる、またと無い好機である。そして、その様な「覚醒した」学習者にとって、今迄の「強制的にやらされる感じ」の、あるいは「単位の為」の英語学習とは格段に違う、自分なりの学習方法を工夫、発見し、毎日努力を重ねて行く事が、むしろ楽しくなる、その様な英語学習が待っている筈である。

## Introducing Interpreting Skills in a Teacher Training Course

文学部 神戸国際教養学科

教授 アン・ケーリ

Ann Cary

Professor, Kobe Global-Local Studies Department

In working with university students enrolled in our certification course for the teaching of English to junior high school students, I find myself constantly deliberating on my own classroom methods. In my course,\* I focus on interpreting techniques. Interpreting between any two languages presupposes an advanced degree of comprehension and oral expressive ability in both of the languages in question. If the meaning carries across from the source language into the target language, one can assume that the interpreter has an excellent, or very high, command of the two languages. With this as an ideal, I guide my students through two semesters of classes to aim for communicative competence in their understanding of English when rendering meaning into Japanese. On occasion, we also work with the two languages in the reverse direction.

By practicing interpreting skills, students come to realize that exact, or literal, translation does not necessarily convey the correct meaning. Many of our students have spent years looking up the exact Japanese equivalent of a new English word; all too often they are still firmly attached to their electronic dictionaries, fingers hovering keyboards to find the very word they think is needed and all too often finding the definition of the word itself without learning its variants or extra examples of functional or idiomatic usage. When students develop the capacity to understand the total meaning of what is being said, rather than just the immediate words, they will truly communicate their intended meaning. If they can gain confidence by practicing the rendering of what is intended into the other language, they can transfer that ability to express in their own words what it is they want to get across. They will start to develop the competence needed for effective communication.

Communicative competence is a key phrase in Japan now being bandied about in the field of English language teaching. Those who propagate the early teaching and learning of English are certain that the younger one is the better she will acquire good pronunciation and deeper expressive abilities in that second language; those who posit that early introduction of English as a second language in the elementary school curriculum will not benefit Japanese pupils make it clear that establishing high-level communicative and critical thinking skills in their first language takes priority. For either camp, it is communicative competence that is the goal.

To learn a language well and develop one's communication skills in that language, one must use that language. This is just as true for the learning of a language as it is for music or sports; constant use is the way we have all learned to speak our first language. Because our students must navigate very dense schedules with classes meeting once a week for ninety minutes, we teachers need to give our students as much practice time as possible. Interpreting techniques give students the chance to use and practice their English language skills.

\* 国際コミュニケーション演習Ⅰ, Ⅱ

## 「社会」「地歴」教員をめざして

文学部 史学科  
教授 小林善文

史学科（神戸国際教養学科の社会科教員免許状取得希望者を含む）の教職総合演習の担当者として、社会（中学）や地理歴史（高校）の教員をめざす学生の皆さんに、資格取得と教職就任の魅力と伝えるとともに、努力すべき課題を述べたい。

史学科では、中学校教諭一種免許状（社会）と高等学校教諭一種免許状（地理歴史）の教育職員免許を取得することができる。例年、入学者の半分近くがこの資格の取得をめざし、学科では博物館学芸員資格と並ぶ重要な資格となっている。教職希望の学生に聞くと、中学校や高等学校で楽しい授業をしてくれた教員に出会い、社会や地歴が好きになり、恩師と同じ道をめざしたいという答えが返ってくることが多い。学生は教職専門科目などの必要科目を修得した上で、母校などに教育実習に出向き、授業をはじめとする教育実践に苦勞しつつも生徒たちの好反応に感激して帰ってくる。教職資格取得には多くの単位を取得しなければならず、大学生活が忙しくなるが、履修の過程での努力が自らの糧となるので、皆さんにはぜひ勧めたい資格である。

社会や地理歴史の教職資格を取得するまでに、『履修の手引き』に掲載されている「教科に関する科目」「教科又は教職に関する科目」「教職に関する科目」等々について、それぞれ所定の単位を履修・修得し、さらに中学校社会を希望する学生には、介護等の体験学習の実習が不可欠となる。大学での授業は、カリキュラムをあまり意識しない教員による専門分野の授業が中心となる。一方、中学や高校での授業は、カリキュラムに従い、その分野の知識をあまりもたない生徒に基本的な事項を理解させる授業が中心となる。教育実習の際に実習生は、得手不得手に関係なく、指示された分野で、きちんとした授業をおこなわなければならない、そのための幅広い知識が欠かせない。むろん若くて人生経験に乏しい学生に、ベテラン教員と同様の味のある授業を期待することは、不可能に近い。それでも教育実習を終えて実習校を去るときに生徒たちの歓送を受けるのは、懸命に努力した情熱を生徒たちが真摯に受け止めてくれるからであろう。教育は人間同士の関係の中で築かれるということを物語る事例と思われる。

教育実習は、教職資格を取得するための重要な関門である。そこでは大学で専攻した分野とは関係なく、学校現場の授業の進度に応じた授業をおこなうことになる。教壇に立つには、指導内容を十分に理解し、ノートを見ずに大きな声で、生徒たちが理解するように教えなければならない。実習直前の詰め込み勉強では、満足できる授業ができるわけではない。何よりも日頃から広く知識を求めようとする姿勢が必要である。教育実習は、生徒たちの貴重な時間を頂いて自らを鍛えているということを忘れてはならない。今後、母校実習が廃止される可能性があり、免許状更新制の導入もある。本当の学力を付けないと対応できない世界になりつつある。それでも生徒や現場の教職員との交わりの中で得た喜びは、その苦勞を吹き飛ばすほどの魅力をもっている。最近、中学校や高等学校の教員採用枠が広がりつつあり、教職に就ける可能性が大きくなりつつある。また教職をめざす過程での学習や実習の経験は、積極的に人前で自らの意見を述べる力をつけるなど、人間形成の面でも大きくプラスする可能性がある。

このところ日本人の内向き志向が強まりつつあるといわれる。史学科にも自ら狭い関心の中で安住しているような印象を受ける学生が見受けられる。しかし、広い世界に目を向け自ら行動しない限り、若い皆さん方の将来の可能性は開けないと思われる。私の教職総合演習の授業では、模擬授業の他に現代社会が直面しているさまざまな問題についてレポートを課している。多くのレポートを書くために、新聞や本を読み、インターネットで検索をし、自らの意見を踏まえた文章構成を考えてもらっている。このような課題を与えられての勉強にとどまらず、自ら率先して世界の動きに関心を持ち、それらに対する自らの意見をもつという積極な姿勢を養ってほしい。それが社会科や地歴科を指導する教員となる基本条件と考えるからである。

# 文学研究科教育学専攻『学校教育実践コース』の創設を

教育学科 教授（文学研究科 教育学専攻 教科教育検討委員会）

松本博史

## 1. 「学校教育実践コース」の必要性

### ①教育現場の緊急課題「小1プロブレム」－東京都教育委員会調査－

いま、教員養成課程をもつ大学においては、学部段階での教員養成だけではなく、大学院においても、より広く高い水準の専門性を有し教育実践力をも兼ね備えた高度専門的教員の養成が焦眉の課題である。そのために、学部＝修士課程の渾一化・一体化・総合化のもとでの教員養成の構築が本学文学部教育学科の最大の課題といえる。

小学校に入学した段階で、学級崩壊に直結する行動が子どもたちの間で多発する「小1プロブレム」が、全国的規模で拡大している。東京都教育委員会は、2009（平成21）年7月に調査を実施し、公立小学校の校長と教員の各1,313人の回答を得ている。1年生で、「教員の話を受けない」「指示に従わない」「授業中勝手に歩き回る」などの行動が長期間にわたって発生したかどうかを尋ねたところ、校長の23.9%、教員の19.3%が、「発生した」と回答した。校長の回答では、都内の公立小学校の4分の1で「小1プロブレム」が発生していたことになる。

問題の発生時期は、「4月」が56.9%、「5月」が19.2%など。終了時期は、全体の54.5%が「年度末まで継続した」という。つまり、2008（平成20）年度中に小学校の4分の1で入学後すぐに小1プロブレムが発生し、その半数以上が解決しなかった、ということになる。

小1プロブレムが発生した学級の担任教員の経験年数を見ると、「採用後30年以上」が23.7%、「同20年以上30年未満」が21.5%となっており、いわゆるベテラン教員の学級で問題が起きる割合が高くなっている。逆に、採用後5年から20年未満の教員は、比較的の問題の発生率が低い。ここに教員の再教育の必要性が喧伝される所以がある。問題行動の内容を見ると、「授業中、勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外へ出て行ったりする」が68.5%、「担任の指示通りに行動しない」が62.1%などとなっている。

問題発生の要因	校長	教員
「児童に耐性が身に付いていなかったこと」	66.9%	73.1%
「児童に基本的な生活習慣が身に付いていなかったこと」	65.9%	65.6%
「担任が個別に教育的な配慮や支援を必要としている児童への指導と全体への指導の両方を適切にできなかったこと」	44.9%	36.0%
「児童に集団生活での経験が不足していたこと」	40.8%	42.7%
「担任が児童の変化に対応した指導ができなかったこと」	32.8%	26.5%
効果的な対策		
「学級担任の指導力の向上にかかわる研修」	52.0%	33.0%
「学校における組織的な協力体制の構築」	45.9%	55.4%
「学級担任の補助となる指導員等の配置」	81.4%	81.0%

校長は指導力など担任教員に原因があると考える傾向があり、教員は耐性の低さなど子どもに原因があると見る傾向がある。しかし、校長、教員ともに効果的対策としてトップに挙げる教員の増員や指導員の配置などの対策が急務であることには間違いはない。

2009(平成21)年4月から実施されている新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針、そして2011(同23)年4月から実施される小学校の新学習指導要領でも、幼稚園・保育所・小学校の三者が連携することを明記している。

しかし、公立幼稚園と公立小学校の連携はある程度進んでいるものの、幼稚園の多くを占める私立と公立小学校との連携は、なかなか進んでいないのが実態である。子どもたちへの指示の出し方一つを取っても、小学校教員と、幼稚園教員・保育士の間には大きな違いがあり、指導者間の意識の差が連携の障害とされるが、連携からさらに踏み込んだ方策として、教員の指導方法に連続性を持たせることや、子どもたちが円滑に小学校に慣れることを目標としたカリキュラムの編成などの幼小連携から一体化へと一歩踏み込んだ研究の創造、学問領域の確立こそが緊急の課題であり、『学校教育実践コース』における「乳幼児保育学」「幼年教育学」は正にその課題に応えることができる。

## ②教員構成の不均衡—中教審教員の資質向上特別部会経過報告(2010年12月27日)—

今後、10年間に、教員全体の34%、20万人の教員が退職し、経験の浅い教員が大量に現場へ入る。我が国の伝統として、教員としての資質向上は、大学における養成段階よりも、採用後、現場における実践の中で、先輩教員から新人教員へと知識・技能が伝承されるといった教員の同僚性に支えられていた。先輩教員に連れられて、地域の授業研究のサークルへ参加したり、夏休みには教科毎の全国大会へも参加した。

現在、そういった伝統が途絶え、現場の教育力が衰退している。日本の子どもの学力低下の原因は、子どもにはなくて、教師の教育力の低下にある、とこれまでささやかれていた声が表面化し声高に叫ばれるようになった。また、近年採用される教員は、実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力が十分に身につけていないことなどが指摘されている。

これからは教員自身が主体的・自発的学習者として、常に学び続ける存在であることが必要であり、子どもの学ぶ意欲を高めるためにも、そのような学びの場としての学校であることが求められる、と経過報告書は述べている。このための方策として、教員の養成や研修においても、指導による学びからワークショップ型の協働的な学びや、ICTを用いた各自の習熟度に合わせた個別学習、子どもの意見を先生にフィードバックするコミュニケーション型の学び等をより重視する方向へと転換する必要がある、と特別部会が経過報告を行っている。この「指導による学び」から「ワークショップ型の協働的な学び」への転換こそが「学校教育実践コース」の中心理念である。

## 2. 「学校教育実践コース」の内容と理念

「子どもの思考や生活をいかに育てるか」といったことを理解・研究する最善の方法は、

研究プロジェクトの協同研究や授業実践(本案においては、「教育実践理論演習」群、「教育実践演習・研究科目」群として位置づける)に学生・教員が共に直接参加して教育・研究活動を行うことにある、とするのが本大学院の基本的理念である。この理念の基で、実践的枠組みとして以下を構想している。

- ① 乳児・幼児・小学校低学年を一貫する「乳幼児保育学」「幼年教育学」の構築。
- ② 「専門的知識」の修得に留まらず、学習の生起する関係性・学習場の形成を重視する同僚性豊かな「専門的実践者」を育成する。相互依存・相互扶助・関係性の中の個人・相互依存的自律性をもった学習集団の形成者の育成。
- ③ 自己の実践を分析的、客観的に評価する力とそれに基づいて、より豊かな実践を再構築する力、個性・異質性・多様性を受容・包容できる学習観の形成。
- ④ 教科指導と生徒指導を一体化（渾一化・ホリスティック・生命論的）させて個に応じた指導のできる力量の形成をめざす。現代の教師に求められている資質・能力を 1. 計画者・授業者 2. 教科の専門家 3. カウンセラー 4. マネジメント・リーダー 5. リサーチ・リーダー  
として位置づけ、上記各教師像の諸能力のモデル・基準を示し、それを教員だけでなく院生にも共有させ、院生による目的意識的な自己発展する内発的教育力を育成する。
- ⑤ 院生のニーズにそった個人的な探究から組織的な「学び」に導く。  
一人ひとりの院生は、自らの興味関心と指導教員との協働に基づき、上記④の特定の教師像に絞って学び、最終的には連携協力校等とも協働しながら、教育実践を通して取り組みたい課題に対する実践的解決策を見出すよう企図する。その際に、複数の教員の協同的・組織的な指導を受けると同時に、教員を目指す院生と教職経験のある院生のそれぞれの特性や経験を生かし、相互の協働によって学びの質を高め合うことをめざす。
- ⑥ 学校の「危機管理」を含み社会（子ども・保護者・地域）と学校の間に、また学校内における子ども間や教師間に生じる問題や軋轢「関係調整」「環境調整」の解消・解決に実践的に対応できる教師の育成をめざす。

### 3. 各科目区分の科目構成とその根拠

視野の広い、高度な専門性をもち、それらを基盤にして学習者のコンピテンシーを最大限に伸ばし、自己実現につなげるような教育実践を行える力を備えた高度専門的教員の養成やキャリアアップを想定した科目群を設置する。

より豊かな実践を再構築する力や目的意識的な自己発展する内発的教育力をもつ高度な専門的実践者を育成するために、本大学院では、特に理論と実践を渾一化（融合・生命論的・ホリスティック）していくことをその特徴とする。それらを具体化し、体現していくために、「教育実践理論科目」群と「教育実践演習・研究科目」群をおく。

I. 『教育実践理論科目』群 = 特論 a.b

◆ 「教育共通領域」 = 特論 a

『共通科目』群として、教育実践力の強化、高度化を目指して、文部科学省が教職大学院の設置要件とする五領域のそれぞれに3科目を配置し、各領域の内容を深め、また関心に応じて院生が選択できるようにした。これは、各領域のいずれの科目においても、その領域内の基礎的・基本的な知識・技能を修得させると同時に、一人ひとりの院生の研究関心に応じて、各領域における“学び”をより

多角的に深めることができることをめざしている。

◆「教育共通領域」	単 位
<b>I 教育課程の編成及び実施に関する領域</b> ①「現代学校教育の課題と教員」 ②「教育課程と特別活動」 ③「特色あるカリキュラム開発」	15科目（各科目2単位）  30単位提供
<b>II 教科等の実践的な指導方法に関する領域</b> ①「授業方法と学習形態の改善(ITの活用を含む)」 ②「教材開発と教材化」 ③「授業設計と評価」	
<b>III 生徒指導及び教育相談に関する領域</b> ①「児童・生徒理解とその指導法」 ②「生徒指導・教育相談の基礎としての発達心理学」 ③「軽度発達障害に関する理解と支援方法」	
<b>IV 学級経営及び学校経営に関する領域</b> ①「今日的課題に即応した学校経営の評価と課題」 ②「学級の主体性を育む教育実践活動」 ③「学校教育臨床・生徒指導」	
<b>V 学校教育と教員の在り方に関する領域</b> ①「学習指導と教師の役割」 ②「地域とつくる学校」 ③「教師のリーダーシップと同僚性の今日的課題」	

◆「教科・領域教育専門」＝ 特論b

学習指導法に関する教員の態度として、「直接伝達的な学習指導法」と「構成主義的な学習指導法」(TALIS: OECDの教育と学習国際調査)の2つに大別される。本大学院では、前者を否定するものではないが、後者の「構成主義的な学習指導法」を中心に据え、「教育共通領域」を基盤として構築された教育観・児童生徒観の上に、各個別教科に関する教科・領域のもつ特性などをふまえ、児童・生徒が能動的に知識を構築する教育実践をめざす「教室や授業のための理論」として、「教科・領域教育専門」領域を設置する。ここには、①個別教科群と②渾一科目群をおく。あるいは、これらは①個別教科群と②渾一科目群から構成されている。

---

## ①個別教科群

---

教師は、教科教育にかかわる理論と実践力、さらに基本的な開発研究の方法を習得し、実際の教科教育の研究開発に従事できるべきである。

子どもをして、自らの能力を発揮させ、自らの学習活動の組織者となるように子どもたちを教育する必要がある。

- ・教科の単元事例についての教材研究・教材解釈
  - ・児童の実態と児童理解に基づく単元の教材作り
  - ・児童の意欲的な学びを引き出す授業デザイン
- 

<科目構成>○国語系（国語・外国語活動）

○数理系（算数・理科）

○生活系（社会・家庭・体育）

○表現系（図画工作・音楽・演劇）

・教科等の実践的な指導方法に関する領域

・子どもの確かな成長・発達と創造的な学力を保證する教科等の実践的指導力に関する内容

---

## ②渾一教科群

---

本学では、教育的事象を統合的に把握することを本体とする。<個別教科群>の内容と方法を基本とするも、対象となる子どもの年齢や成長・発達の特性から、教育のあり方、児童・生徒の成長等を連続性と全体性の視点で捉えるといった柔軟性と多様性をもった領域<渾一教科群>設置する。

また、昨今の教育の制度変更や新たな教育パラダイム構築に向けた動きがあるが、そうした教育的動向、現代的課題に対応した実践力の育成を企図する。

---

<科目構成>○乳幼児保育学Ⅰ（乳児）（乳幼児保育）

○乳幼児保育学Ⅱ（幼児）（幼児教育）

○幼年教育学Ⅰ（「あそび・生活」による教育）

○幼年教育学Ⅱ（「こころ」の育ちに関する教育）

・保育・幼児教育・小学校低学年教育の連続性や連携を視野に入れた保育・教育の構築

・乳幼児期の豊かな成長・発達と創造性につながる力を育む遊びや生活を重視した教育

---

幼児期教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について、現状ではその重要性を認識しながらも、確固とした理念の基で幼小接続が実践されているとはいえない。幼小教育とは、目標・目的、教育課程、教育活動において、「幼は小に」「小は幼に」と、一方が他方に歩み寄る、あるいは妥協点を見いだすことが本義ではない。本学の構想する「乳幼児保育学」「幼年教育学」では、「学びの萌芽期（幼児期）」と「学びの自覚期（児童期）」といった発達の断層を止揚する方法として、人との関わりやものとのかわりを通して形成される「あそび・生活」と「こころのそだち」を幼小の一貫性・連続性・渾一性を理念の根底に据えた創造的な内容論と方法論を実践的に構築する計画である。

## Ⅱ. 『教育実践演習・研究科目』群＝ 演習 a.b

理論と実践の渾一化・総合化を具体的に展開し、体得していく場として『教育実践演習・研究科目』群を配置し、その中で各院生の教育的経験と技量に対応して段階的・多様に計画された「教育実践のための演習や研究」を行う。

「教育実践理論科目」群に連続する科目として、教育全般および各教科実践に必要な「授業や保育のための理論」を学び修得することからはじめ、それらを高度に実践化・普遍化するための力量を養成する『教育実践演習・研究科目』群を置く。

『教育実践演習・研究科目』の統合的研究として、本大学院では、「渾一教科群」の内容論・方法論を実践的に構成することで、保育園・幼稚園・小学校低学年を一体化した先端的な「乳幼児保育学」「幼年教育学」の構築を重要な課題とする。

◆「教育実践演習 a」＝ 演習 a

①典型的な教育実践やフィールドワークを分析対象とすることで、各教科の実践力に必須の知識・技能を明確にする。すなわち、教育実践研究法の研究（メタ研究）である。その過程を体験する中で、高度な教育実践のための豊かに蓄積された知識・技術を習得し、自己の実践力の強化・高度化を図る。

②各院生が授業を行い、全教員と全院生が参加する「授業カンファレンス」を実施する。

その全過程を「実践報告書」にまとめることで、教育現場での研究紀要や研究報告書を作成する際に必要となる能力を獲得させる。

◆「教育実践研究 b」＝ 演習 b

実践的に大学院で学ぶ成果を実感できる内容と時間を保障する。

院生各自に <自らの課題意識に基づいた実践課題の発見→課題解決に向けての仮説の設定→課題解決へのプログラムモデルを開発→解決のための情報収集・実践・分析・結果と評価→改善策の提案→研究全体の成果を発表>といった科学的コンピテンシーを確立させる。この成果を全院生・大学院担当全教員が一堂に会し、各自の教育理論・経験知・実践知を出し合い、摺り合わせ、協同的・臨床的に評価活動を行う。

#### 4. おわりに

経過報告が、「専門性のある質の高い教員を養成するためには、教職課程を有する大学と教員養成に携わる大学教員一人一人がその責務を全うする意識を持ち、大学の有する高度で専門的な知と人材を集結し取り組んでいく必要がある」というように、本学にとっても、「学生」を含めていかに良質な「知と人材を集結」できるかが第一の課題である。

第二には、教員養成の学部・修士課程を一貫したカリキュラムの編成である。筆者の関係する教科に限って言えば、「算数概説」（一回生前期）「算数科指導法」（一回生後期）の2科目4単位のみで、教育現場へ学生を送り出すことになる。さらに教職や教科の基礎・基本の習得を目指した学士課程におけるカリキュラムの検討が必要であろう。

筆者の希望は、一回生では、「基礎数学」といった中学校・高校初学年程度の数学の復習を必修とする。また、「算数概説Ⅰ」（二回生前期）、教育実習のための「算数科指導法Ⅰ」（二回生後期）、四回生前期の「算数概説Ⅱ」、四回生後期の「算数科指導法Ⅱ」では、教育実習での体験を生かし、さらに高度な専門的知識と実践力をつけるために、全員がマイクロティーチングを体験する。自らの実践と友人の授業をカンファレンスすることで実践的指導力を体験的に身につけさせる。

また、理科と数学科を融合した「数理実験」といった科目を新設し、「算数・数学的活動」や理科実験を中心とした「数理に強い教師を養成する女子大」といった他女子大学との差異化を明確にするのも一方法であろう。

最後に、教員養成が本学の大きな柱の一つであるならば、その設備・備品として、大学内に、ごく普通の小学校の一教室を忠実に再現したモデル教室の設置が望まれる。隣の部屋には、教室の教師と児童の活動を観察できるモニター設備を完備する。公立小学校のークラスと担任が一日をそこで過ごしてもらう（公募する）。もちろん事前に大学側（学生を含め）と協同研究を重ねておく。隣接する部屋から、本学教員と学生が授業をモニターしながら、即時的・臨床的に授業カンファレンスを行う。これは授業者である先生方にとってもメリットは大きい。この際、先生の実践の全体について分析・批判・助言ができる本学教員を「集結」しなければならないことはもちろんである。

学士課程改編とともに、「教員養成4年プラス $\alpha$ 」とした国の審議の経過を見据えつつ、我々の理想とするもの、最高の品質の教育・学問を提供するといった理念を確立することが必要であろう。本学は、独自の発想力と創造性をもって、「学校教育実践コース」を立ち上げ、他大学との差異化をはかるべきであると考えている。

本試案は、上記1.「学校教育実践コース」の必要性①②で述べた現代的課題に対応するものとして構想されたわけではない。教育の現代的課題に応えるために、教員のライフサイクルを通じてより高度な専門性と社会性、実践的な指導力を確立し、向上をはかる大学院の在り方、性格付けを議論する中で紆余曲折を経ながら本案は形を整えていった。図らずも、本大学院の目指す理念が足下の現代的課題に正面から応えるかたちとなった。

本学では、平成20年11月、文学研究科教育学専攻『学校教育実践コース』の設置を検討するために教科教育検討委員会（委員：中村座長、小原、荒堀、近藤、西田、守本、松本、アドバイザー：三宅、金岩）を組織し、平成22年12月に『学校教育実践コース』試案を完成した。二年以上にわたり、試案を各種委員会に提示し、多くの先生方にアピールしたが、より一層充実したものとするために『教職課程年報』に紙幅をいただき、読者からの有益なるご意見をいただき、より完成度の高いものとした。

（文責は全て松本にある）

# 平成 22 年度の教育実習を終えて

教職・資格支援センター

鷲尾悦朗

教職を目指す皆さんには、教育現場で経験豊富な先生方の指導を受けながら、大学の授業では修得できない児童・生徒に対する直接的な教育活動を体験するという教育実習が課せられています。

教育実習は、自らが行う教育活動を通して、「学校教育全般にわたっての理解を深め、教師として必要な知識・技能を身につけるとともに、実践的指導力の基礎を培う。」という重要な目的をもった意義深いものなのです。

平成 22 年度の教育実習も多くの小・中・高等学校にご協力をいただき、219 名の学生が大きな成果をもって、無事終えることができました。

ここでは、教育実習に関して、事前・事後指導での学生アンケートや教育実習ノート等から、個々の学生が何を学び、どう成長してきたのか、その成果を明らかにしていきたいと思います。そして、お世話になった学校の校長先生をはじめ、ご指導をいただいた多くの先生方へのご報告と次年度教育実習を行う学生諸君への参考となるよう、教育実習を終えた学生の生の声を中心にしてまとめていきたいと思っています。

## 1 実習生の感想（1）～教育実習とは～

教育実習前の事前指導の中で実施したアンケート調査から、教育実習を受けるにあたって、ほとんどの学生が大きな不安を抱えていることが明らかになりました。中でも、一番の不安要素は、「子どもたちとうまくコミュニケーションが取れるだろうか」、「信頼関係を築くことができるのだろうか」などという教える側と教わる側の関係づくりにありました。

また、それに関連して「授業がうまくできるのか」ということも大きな不安要素となっていました。これらは、教育実習という大きな試練に対する前向きな不安といえるでしょう。

しかし、「私のような者が教壇に立っていいのだろうか」とか「子どもたちが私を受け入れてくれるのだろうか」など、消極的な不安を訴える学生も若干いました。

一方では、スクールサポーターなどの教育ボランティアの経験から長期にわたる教育実習に対して、不安よりもむしろ「楽しみだ」と主体的に捉えていた学生も少なくはありませんでした。

いろいろな不安や期待をもって取り組んだ教育実習でした。その教育実習を終えて、教育に関してどのような心境の変化があったのでしょうか。また、教職への思いがどう変化してきたのでしょうか。事後指導のレポートから探してみたいと思います。

- ・ 私が学んだこと・・・教師として何よりも大切なことは、子どもたちとの信頼関係を築くことです。担任の先生と子どもたちの様子から、そう感じました。○年○組の子どもたちは○○先生のごことが大好きです。その信頼関係がなければ授業や楽しい学校生活は成り立たないのだと実感しました。
- ・ 私は、今まで子どもたちに「ことのよし悪しを教える」とは、「注意」をすることだと思っていました。だが、担任先生と子どもたちのやり取りから、それは、「注意」ではなく、逆に良い行いをしている子を「褒める」ことで「善悪」の判断ができるようになること、また、褒められることでさらに意欲的な態度を示すようになっていくと思えました。褒められる児童は、他の児童の手本ともなり、クラス全体の雰囲気もよくなるように感じました。
- ・ 参観日がありました。その後、学級懇談会に参加させていただき、直接保護者の声や様子を見聞きすることができました。学校と家庭との連携とありますが、実際「保護者の要望や思いを汲み取りながら連携を深めていく難しさ」を感じました。
- ・ 教師という仕事の現状や大変さを目の当たりにしたが、それ以上にやりがいや楽しさが強く心に残っている。
- ・ 教師という仕事がしんどいのは自分の親を見ていてわかっていたつもりですが、こんなにつらくて、苦しい1ヶ月を経験したことはありません。しかし、私は、楽しくて、こんなにも本気になれる仕事があるのだと、今、感じています。
- ・ すさまじく過ぎ去っていく毎日の出来事の中で、先生方の日々の努力や苦勞を身近に感じ見てきました。そんな教育の現場を見てもなお、私は、教師となって子どもたちとともに学び、ともに喜び合いたいと思っています。
- ・ 教育実習を通して、教師という仕事の素晴らしさ、大変さなどたくさんのごことを学びました。その上で教師になる意思が固まったので、私にとっての実習は実り多いものとなりました。

## 2 実習生の感想（2）～授業について～

教育実習に行く前は、(1)で紹介したように、「授業がうまくできるか」ということが不安要素の一つでありました。「子どもたちが先生としてみてくれるだろうか」とか「わかりやすい授業ができるだろうか」などの多くの不安を抱えながらの実習でしたが、実習生は皆、全力で子どもたちや教材と格闘し、最後にはみごとに自分の力で研究授業をやり遂げています。

不安を抱えての実習でしたが日を重ねるにつれ、子どもたちとの信頼関係も深まり、授業らしい授業もできなかったが、担任の先生の丁寧な指導と子どもたちの協力で授業がうまくなっていったようです。最後の研究授業では、睡眠時間を削って教材研究や授業準備に没頭し、指導案を練り上げ、満足のいく授業ができたようです。この授業ができたという達成感、教材研究・授業への手ごたえなど、それらが相まって大きな自信となって、人間的にも一回り大きくなって大学に戻ってきました。一つのことを成し終えたすがすがしさは、何にも変えがたい一生の宝物です。実習ノートから授業への真剣な取組みの様子と授業の楽しさ・難しさなどを抜粋してみました。

- ・ 授業は自分の思いや考えだけではなく、それぞれの教材や児童の実態にそって研究しなければならぬものだと実感しました。
- ・ 子どもたちから「先生の授業わかりやすかったよ」と言われた時やわかった時のパッと明るくなる顔を見ていると本当にうれしく思うと同時に、今よりももっとわかりやすく楽しい授業をしたいと勇気づけられました。
- ・ 教材研究に終わりはないということを感じました。授業の方法は一通りではなく、学級の数だけ、指導者の数だけあると思いました。
- ・ ある日、急遽、一人で体育の授業をすることになりました。指導案なしで授業をしました。この時、指導案の必要性や授業の展開や構想をもつことの大切さを実感しました。
- ・ 私が授業をしたときに、子どもたちが不安そうな顔をしていたのが印象的です。きっと、私の緊張や不安が子どもたちに伝わってしまっていたからだと思います。授業中に子どもと目が合ったときに、私がニコッと笑うと子どもの表情がゆるみました。また、社会科の授業で、大学で一ノ谷に行ったときのことを話すと、子どもたちは興味をもって聞いてくれました。子どもの授業中の態度は、教師自身の心の動きや態度が大きく影響するのだと感じました。
- ・ 自分で用意した教材で児童が学習し「わかった!」と言ってくれる時のうれしさ、児童の反応を思い浮かべながら行う教材研究の楽しさ、・・・一つの授業を作り上げるまでに多くの時間が必要でしたが、楽しい実習でした。最後には、授業をすることがとても楽しいと感じるようになり、児童の「わかった」という瞬間を共有できることがとてもうれしく感じられるようになりました。
- ・ 「学習の主体は児童である。」頭ではわかっているつもりでも授業をしてみると実行できていません。気が付けば私ばかりが話していて、無理やり子どもを引っ張っています。そこで授業で見つけた課題を次の授業の課題としてチャレンジすることにしました。
- ・ 国語の授業で予想していなかった答えが返ってきたので戸惑ってしまいました。最後は、多い意見でまとめたのですが、何人かの児童は納得のいかない授業になったのではないかと感じています。
- ・ 指導案作成の際には、発問や子どもの反応を十分吟味して、細案まで作ったのですが、授業をしてみると、子どもたちの発想は私の予想をはるかに超え、指導案がいかに浅いものであったか思い知らされました。また、その予想を超える発言に私は対応ができず、あやふやにしてしまったことが悔やまれます。

### 3 先生方からのアドバイス

実習をさせていただいた学級の子どもたちにとって、実習生は「先生以外の、自分たちの評価者ではない、気が置けないお姉さん先生が来てくれた。」という思いから喜んで皆さんを迎えてくれたことでしょう。しかし、実習生を受け入れるということは、校長先生や担任の先生をはじめ多くの先生方

にとっては、本来の職務以外の仕事となり大変厄介なことなのですが、先生方は、後輩を育てるとい  
う使命感に燃えて、皆さんを受け入れて下さっています。そしてどの学校においても熱意ある指導を  
していただきました。その先生方のご指導は、皆さんにとって大変有意義なものとなり、教職への憧  
れをより現実的のものとして、意欲向上につながっていくものとなりました。

また、校長先生からは、「教職とは何か、教師のあるべき姿とは…」など、みなさんに立派な教師になっ  
てほしいという思いが込められた言葉をいただいています。これらは、「教師としてこうあるべきだ」  
とか「教師とは、教育とは…」と教育の本質を問い直す言葉でもあります。しっかりと心に刻ん  
でおきたい言葉ばかりです。

#### 〔担任の先生から〕

- ・ 授業は、技術以上に心が大切です。話に抑揚をつけることや聞かせる技術にこだわるよ  
りもあなたの熱意や誠意が何よりも重要なのです。最後の授業には、心がこもってしまし  
たね。だから、子どもたち一人一人の心にあなたの言葉が届いていましたよ。
- ・ 机間指導で大切なことは、つまずきを個別に指導するだけでなく、どの子がどのような  
考え方をしているのかをチェックし、自分の考えに自信をもたせて、発表を促す役目もあ  
るのです。
- ・ 「私ならこうする」という自分なりの考えをもつことも大切ですが、「上手な先生からそ  
の技術を盗み取り、自分のものにする」ことも大切です。
- ・ 子どもの後ろにはかならず家庭があり、家庭との連携のとり方しだいで、学級経営がう  
まくいったりいかなかったりします。「学校」・「保護者」・「子ども」それぞれの言い分があ  
るので、うまくかみ合わせることは難しいです。でも、目的は子どもたちのよりよい成長  
を目指すことに変わりはないのです。
- ・ 子どもたちは、教師の姿勢に感化され成長するのです。子どもを変えようとするなら教  
師自身が変わろうと努力しなければなりません。
- ・ 子どもたちに何を伝えたいか、そのためにはどう授業を進めるか、心に残るようにする  
にはどこに時間をかけどのような教材を使うかなどを考えることが大切です。
- ・ 実習を通して子どもたちから寄せられた信頼感や感謝の気持ちの大きさが、あなたの教  
師としての資質の大きさを物語っていると思います。
- ・ 教師にとって大切なこと「健康な体」「柔軟な心」そして「笑顔」
- ・ 私が子どもを叱る時は、「①大きなけがにつながるような危険な行為があったとき②言葉  
や行動で人を傷つけたとき③繰り返し注意していることが守られていないとき」を原則と  
しています。

#### 〔校長先生から〕

- ・ 児童は、「学校に遊ぶために来ているのではない。学ぶためにきているのだ。」というこ  
とを心に刻んで子どもたちに接してほしい。

- ・ 礼儀正しく、話を聞く態度や受け答えもしっかりしており好感がもてました。初心を忘れず、さらに教師に必要な資質を身につけてください。
- ・ 「教師になる」という確かな意思が大切です。意思あるところに道ができます。まず、そのための切符を手にしてください。真の教師になっていくのはそれからです。子どもたちがあなたを鍛え育て、教師にしてくれます。
- ・ 「笑顔」「優しいまなざし」「真摯な子どもへの接し方」教師として大切な資質です。技術的な面は、経験を積みれば誰でも身につけることができます。今の志を大切に…
- ・ 学校とは理想を語るべきところですが、現実を踏まえながらも常に理想を掲げて教育に当たる姿勢が必要です。教師とは、そういうたゆまぬ努力が求められる職業であると認識し、精進してください。
- ・ 教育とは、人生の生き方の種まきをすることです。あらゆる教育活動を通して豊かな人間性を育てることが教育の究極の目的です。
- ・ 「授業はドラマである」授業をどう演出し、プロデュースするのが教師の授業力です。45分間のドラマをどう創るのか、飽きさせないでワクワクするような授業を考えてください。
- ・ 教師は、子どもの能力や態度、学ぶ姿勢に問題があると考えのではなく、自分自身が子どもには見えないところで、指導方法や授業展開の工夫・改善、わかる喜び味わせたかななどを自問自答し続けることが大切である。
  - ・ 「教師である」ということの基本は、「人間としていかに在るか」ということ・・・人や物事に対して誠実に対応することを大切にして、自分をさらに高めてください。

## 5 教育実習前に準備しておきたかったこと

「後輩に伝えておきたいことは何か」を事後指導アンケートで聞いてみました。色々なことが出てきましたが、個別の問題は除くとして、全体に関係することをまとめてみました。「後悔先に立たず。」と言います。教職を目指して、今後に教育実習を控えている1、2、3年生の皆さんは、しっかり準備して実習に臨みたいものです。

- ・ 授業の中での模擬授業だけでなく、友達と授業練習をしておく。
- ・ 漢字（書き順・ハネ・トメなど）についてもっと勉強しておく。
- ・ 1年生から6年生までに習う漢字（配当漢字）について調べておく。
- ・ 画用紙・もぞう紙などをつかった学習資料づくり
- ・ 実際に黒板を使ってチョークで字を書く練習
- ・ 板書計画・発問について（授業のイメージトレーニング）
- ・ 学習指導要領をよく読んでおく。

- ・ 人前で話すことの体験
- ・ 発達障害に関する知識
- ・ ひらがなを含め、字を丁寧に書くこと。(先生の字は子どもの手本)
- ・ スクールサポーター等教育ボランティアの経験
- ・ えんぴつ・はしの正しい持ち方
- ・ 敬語・礼儀作法・マナー・言葉遣い

## 6 まとめにかえて

教育実習が始まる前は、自分自身に対する自信のなさや授業に対する不安が渦巻いていましたが、実習を終えた今、「不安」をそれに倍するほどの「自信」に変えて大学に戻ってきました。それは、実習校で児童生徒や先生方と交わした温かい人間的なふれあいによるものと思います。そうした絶ちがたい思いを抱くことができたのは、教師としての資質の表れかもしれません。実習ノートの最後のページには、お世話になった先生方への深い感謝の気持ちと、わずか1ヶ月間の教え子たちへの溢れんばかりの愛情がにじみ出た文章が綴られていました。

これから教育実習を迎える皆さんは、先輩からのメッセージを参考にして、実のある教育実習にしてほしいと思います。

また、実習を終えた皆さんは、これから教員採用試験に向けて、知識や教養を高めるための勉強はもちろんのこと、自分自身の人間性をさらに磨くということも重要な試験対策であると捉え、教師としての資質をさらに高めてほしいと思います。実習の楽しかった思い出や「先生になって帰ってきてネ」という純真な子どもたちの励ましの言葉を糧に採用試験に立ち向かってください。

## 家庭科教員の養成

家政学部 家政学科  
教授 中井昌子

今年は神戸市の中・高の家庭科教員の採用試験に現役の学生が合格をしました。神戸市の家庭科は中・高両方の免許状が必要であり、採用人数も少ないため、学科ではかなりの難関と位置づけており、最近では現役での合格者が出ていませんでした。本人はもとより学科をあげて喜びに沸きました

本年度合格をしたのは、神戸女子短期大学食物栄養学科で栄養士と栄養教諭二種免許状を取得し、神戸女子大学家政学部家政学科3回生に編入をしてきた学生です。家政学科では被服系・住居系の科目を多く設置しているため、1, 2回生に開講している学科必修の専門科目の多くを3, 4回生の2年間で取らなければなりません。また、3週間の教育実習は母校ではありませんでしたが、それも適度の緊張感があって幸いしたのかも知れません。卒業研究のテーマも中学生のお弁当に関するものでした。

教職を取りながら、就職活動に時間と労力を費やし、内定がもらえないと自信を失っていく学生が多い中で、「教員免許を取って、家庭科の教員になること」という目標に向かって淡々と授業に出席し、勉学を続けてきた彼女の信念が合格につながったのだと思います。

かつて私も前職で教員採用に関わっておりましたが、面接での二言三言をきくと、本当に教員になりたいと思っ  
て努力している人は伝わってくる何かが違っていました。彼女には、採用試験の集団面接で積極的に発言しなさいとか、司会を買って出なさいとか一度も言ったことはありません。それどころか、以前は行っていた模擬面接すら実施しませんでした。普段の彼女を見てもらえば大丈夫だと思ったからです。1次合格をしたあとの2次対策は、家庭科実技の予想課題を一緒に考え、猛暑の1日を費やし、手縫いで数種類の作品を試作しました。本番は予想していた課題ではありませんでしたが、丁寧で美しい仕上がりだったのだろうと想像できます。

採用試験のために特別な準備をすることはもちろん必要ですが、まず、大切なことは、教員になってこんな教育がしたいという具体的なビジョンを持ち、それに向かって努力を続けることだと思います。

学生には常々話していることですが、家庭科の教員は、日々の生活そのものが教材研究だということです。授業など人の目に触れる部分はわずかで氷山の一角のようなものですが、水面下にある部分（人間としての教養、教員としての知識・技能など）を大きくすることで、水面に出る部分が自ずと大きくなり深まりがでてくると思います。学習指導要領に書かれていること、教科書に書かれていることをどのように教えるか、机の前に座ることももちろんですが、社会の変化に敏感になり、世間の動きをしっかりと自分の目で確かめること、肌で感じる必要があると思います。そのためにはアルバイトも友達との遊びやおしゃべりも役立ちます。幅広く奥深い教養として生きてくるはずです。時間や気持ちの切り替えを上手に行い、目標に向かって努力してほしいと願っています。

故行吉哉女先生から多くの優秀な家庭科教員を送り出すようにと命を受けて以来16年間、本学で家庭科教員の養成に微力ながら携わって参りましたが、新年度から新しい先生と交代をいたします。地道に研究を重ねられ、多くの業績をお持ちの先生に学び、神戸女子大学家政学科の教員養成が一層充実し成果をあげられることを期待しています。